

平成24年度長野県生涯学習審議会 議事概要

期 日：平成24年12月11日（火）

時 間：11時00分～16時00分

場 所：栄村役場、小滝公民館、栄小学校

○出席委員 北林 瑞穂委員 木下 巨一委員 小林 文子委員  
土井 進委員 東福寺裕子委員 中村 雅代委員  
三澤 育子委員 山崎 弘委員

○欠席委員 白戸 洋委員 塚田 芳樹委員 山本 裕一委員

○栄村の出席者 島田 茂樹村長  
教育委員会 宮川 幹雄教育長 島田 益夫生涯学習係長  
復興支援機構「結い」 相澤 博文代表  
小滝公民館 中沢 謙吾館長  
栄小学校 渡辺 要範校長

○県の出席者 教育委員会 山口 利幸教育長  
南信教育事務所 唐澤 久樹生涯学習課長  
中信教育事務所 浦野 栄一生涯学習課長  
北信教育事務所 岡田 哲夫生涯学習課長 後藤 卓己指導主事  
東信教育事務所 佐々木哲也指導主事  
生涯学習推進センター 青樹 令一所長 三溝 裕子主任指導主事  
教育総務課 久保 友二課長補佐兼企画係長  
教学指導課 大日方貞一教育主幹兼係長  
文化財・生涯学習課 阿部 精一課長  
若狭 利行課長補佐兼総務係長  
下條 伸彦生涯学習係長 島田 千恵主事  
原 勝人主任指導主事  
蟹澤 友司指導主事 小池 千尋指導主事

1 開会行事

(栄村役場)

- (1) 長野県教育委員会教育長挨拶
- (2) 栄村村長挨拶 ※村議会中のため、昼食時に挨拶頂く
- (3) 審議会委員自己紹介
- (4) 会長および会長職務代理の決定  
委員の互選により、会長に土井委員を決定  
会長の指名により、会長職務代理に白戸委員を決定

## 2 実践発表・意見交換

(栄村役場)

「復興支援機構『結い』の活動について」 代表 相澤 博文 氏

(土井会長)

それでは審議会に入ります。はじめに、栄村「復興支援機構『結い』」の活動について、相澤代表よりご発表いただき、意見交換の場を持ちたいと思います。それでは相澤様お願いします。

(相澤博文復興支援機構『結い』代表)

ご紹介いただきました相澤でございます。どうぞよろしく申し上げます。今日は雪、昨日、一昨日とすごい降り、いつもよりちょっと早いかなと思いますが一遍に降ったので地元でもびっくりしています。

私は震災から5日後に「栄村震災復興支援機構『結い』」を村、青年会議所、それからNPOなど8つの団体で立ち上げ支援活動をしております。それではその活動について説明させていただきます。

栄村の地形というのは、とにかく一言でいえば豪雪地帯で、7メートル85センチという記録が残っています。駅の所にその標柱があります。その中でやはり風光明媚と言いますか、百名山、二百名山、苗場山が連なっていて、そこには豪雪の文化があります。ここ栄村は新潟からの入口であり、新潟への出口でもあります。すぐもうお隣が新潟県です。そして、私どもの支援機構には『結い』という名前を付けたのですが、すでに栄村には結いという言葉は標準語で存在していたそうです。たとえば、前の高橋村長が、「『田直し、道直し』は、国の力に頼らないで自分たちの力でやっぺいこう」と考え、そういうことになりました。道直しでは、国の規格に合わせると、栄村の地形に合っていないのに、そのためにお金を使わなければいけない。では、なにが必要かということを見ると、やはり自力でやったほうがよっぽどいい道ができるし、管理もしやすいということです。私どもは行政と地元の関係を貫く結いの心が大切であると考え、栄村震災復興支援機構という名前の後に『結い』という名前をつけさせて頂きました。これは、村民のニーズに対応した復興を図り、村民の力の結束と希望のある地域づくりを支援していこうというものです。

3月12日の未明の話になります。震度6強、そして余震が度々ありましたが、そこで大事なところは、死亡者がいなかったということです。それはなぜかと言いますと、最初の本震でみなさん飛び起きてすぐ外に出たからです。3月12日ですからまだ寒い雪のあるという状況でした。また、余震の後の話で、皆さんの寝床はいろいろなものが落ちてきたそうですが、その話を聞きますと、テレビは斜めにすっ飛んでいくわ、タンスも斜めにズドンとすっ飛んでいくわ、これまで見たことのない光景だったと印象付けられています。そんな中で、本当に死亡事故がなくて良かったんです。

暗い中の避難後、この村役場も避難所になっておりました。避難所の生活というのは大変で、通常と異なる環境の中、プライバシーなどいろいろな問題があるのですが、不安を募らせる要素も非常にありました。皆さんは夜、避難をしてきたので、自分の家が一体どうなっているのか、心配していました。それが、消防団活動が非常にスムーズに行われまして、その献身的な努力のおかげでしょう。地域課の警察の方が言うに、こうし

た夜の災害が起きた際には、それを助けようという人だけではなく、反社会的な物取りなどが入ってくる。夜が明けてみると被害を受けているそうです。そこで、警察では900軒ぐらいの栄村ですから、おそらく200から300ぐらいの被害届が出るだろうと想定し、そのための用紙を準備して待っていたのですが、実際には被害届は一つも提出されなかった。それは何故かと云ったら、夜間の対応で大変だったのですが、やはり地域が地域を守るという仕組み、消防団の仕組みが非常に的確に、そして効率よく、パトロールしながら村民の生命財産を守ったという、予想はしていた組織でございますが、こういう地域のつながりがこんなに効果的にできたことはなかったのかなと思います。こうした結果となった一つには、典型的な田舎社会の消防団員という社会的位置づけが、大変効を奏したと言うことでございます。私どもの組織はこういう形で誕生したのですが、栄村ネットワーク、日本青年会議所長野ブロック、それから県の対策本部はもうなくなりまして、現在6団体で一応構成しております。おかげさまで仮設住宅から災害住宅への引っ越しも終わりまして、復旧の支援ということはだいたい終わっていると考えております。これで、一応『結い』の活動は終わろうかなと思っていたんですが、実は復興の話が出てきまして、4月以降にまた活動を続けるという話が進んでおります。予定では、また『結い』として、地域のための貢献をしていくということになります。

「栄村復興支援機構『結い』」を紹介します。栄村役場は議場というのではなく、こうした会議をする会場が必要なときに議場になります。ここを貸していただいて活動しました。(スライドを示し) これは朝の様子でこんなにいろいろ人が見えています。

ちょっと早足で申し訳ないのですが、村内の被害状況を紹介します。大きな所で全壊33、大規模半壊21、半壊148、一部損壊486棟。中条地区で一番大きな土石流が発生しました。これが非常に難問で、引っかかっている土石がいつ動くか分からない状況でした。中条地区が避難するのに一番遅かったです。こうした状況で土石流が発生して、中条温泉「トマトの国」へあわや流れ込んでいこうとるところまで来ていました。実際に「トマトの国」では宿直の方がいて、命からがら避難してきたそうですが、すんなり避難できなくて雪崩を乗り越え、乗り越え下の通りに来たという話です。そういう意味ではこの近くが震源地かなと感じるのです。実際は大井平というところが震源地という話を聞いております。この写真は激震地区の青倉という所です。

これは12日の写真です。住宅よりもこのように物置が壊れてしまうというのは、やはり柱の数なのではないでしょうか、大変多くありました。

この写真は全壊の青倉公民館で、ここにはお祭りのいろいろな道具が入っていましたが、壊れてしまって、今年も地域のお祭りが出来ませんでした。

(スライドを指しながら) こちらの斜め反対の方に新しい公民館ができております。これは中条川の飯山線です。手前に中条川がありますが、こちら辺もやはり土砂が抜けて飯山線が不通になっております。1ヶ月と22日ぐらいで復旧しましたが、飯山線は100円稼ぐのに1,000円かかると皆さん噂しています。それぐらいの赤字路線ですが、2ヶ月もかからないで、冬の間直したと言うことは、JRもかなり気合いが入っていたのではないかと思います。

(スライドを指しながら) これが森宮野原の駅です。こういったラッセル車もホームにすり寄ってしまって脱線しています。これを見るとなんでもないので、コンクリート

にへばりついています。これをどけるのに2週間ぐらいかかったと思うのですが、この震災が起きたときは2mの雪がありましたので、雪の影響がダブルパンチになったのです。

(スライドを指しながら) これは県道のスノーシェードなのですが、決壊をしています。これは吊り天上ではありませんが、それと同じような状況です。時間がずれていれば通勤、通学の途中の方が通りますので、事故が起きたのではないかと予想されるくらいの惨憺たるものです。これは皆さんが渡りました北沢橋というトンネルを抜けてすぐ栄側の橋台です。人間を見て比較できると思いますが、大きな揺れで、これだけパツーンとってしまったと言うことで、117号線は震災以降通行止めで緊急車両以外は通さないということになりました。復旧は山を崩してかなりの時間がかかりましたが、補修強化させて現在の117号線の橋台として使っています。

同じく青倉地区なのですが、物置がみんなぐちゃぐちゃになりまして、物置の中の車もこうしたぐちゃぐちゃの状態です。それから、こういう物置ですから薪を積んであって、その薪が崩れてきて車を潰しました。それから石垣で作った車庫も、石垣が崩れて車を潰してしまいました。いろいろな影響が出てます。

(スライドを指しながら) これは横倉地区です。これは皆さんがこれから行く栄小学校のすぐ隣にあった家の様子です。これはまだ壊す前の家ですが、壊す前の時は雨戸から何から全部取れて中が全部見える状態で、指で押すとくちゃっといく位の傾き方になっていました。現在この裏に仮設住宅ができました。これは同じ地区ですが、1階が潰れてしまっているところです。よく見ると電線に引っかかっています。これは電線ですが、頭をちょうど押さえていたという状況で、倒れなくて良かったと思うのですが、こんな状況で住んでいる方は、大事なものは全部1階に入っていましたので、悲しげな顔をしていました。

村の被害の状況ですが、人的被害は無かったんですが、軽傷が10名ということで、後に災害関連死で3名の方が亡くられています。これは公共的な被害になるのですが、復興計画策定の中でもいろいろ出されましたが、見えない被害もあるということです。見える被害は当然分かるのですが、雪で見えない被害、雪の下で何が起きてるか。いわゆる農地が、田んぼが地割れをしてしまっている状況が、2ヶ月くらい分からなかったのです。それから、それぞれの暮らしの、それぞれの人の被害状況というのは、分からないわけなんです。このような見えない被害をどう扱うか。個人の被害もあるのですが、通常復旧する場合は、被害額がどれくらいでどのくらいの被害を想定して、復旧をするんだということなのですが、個人の家の被害額って出せないんです。それから、見えない被害を一体どう扱うかという問題が非常に多かったです。そして、人の心の問題はどうなっていくのか。その辺が被害の状況として出てきますので、避難所にいた時、私どもも一生懸命、また多いときは120名ぐらいのボランティアがお見えになって活動を続けているんですが、被災者の方から「おまえさん達は一体何をやっているんだ」という話になりました。

避難所にいると情報が入ってこない。避難所の生活だけになってしまう。朝昼晩の食事は届く、暖かい布団もあるけれども、外にも出られない。避難所の中だけの生活になってしまう。外の状況が分からない。そうするとストレスが貯まってしまう。それで「おまえさん達、一体何をしているんだ」という図式になってきますので、私どもは新聞を作って、どこどこで何をやったということを新聞にしてお配りするようになりました。被害の状況というのは様々です。今日これから小滝に行かれると思いますが、小滝集落は

両方の道が通れなくなって、ヘリコプターで搬出されたという地域です。（スライドを指して）ここにも書いてありますが、災害では見えない被害というものの扱が大変だということです。震災であぶり出される実態なんです、平時から有事に変わると、平時にくすんでいた問題が有事になって一気に出てくるのです。これは震災絡みなのですが、有事絡みで出てくると、とにかく普段から少子高齢化の中で村づくりの問題やいろいろな問題も含んでいるのです。たとえば小滝地区でも公民館が壊れてしまって、皆さんで地域集落をどう再建されるかという話し合いの場がない。話し合うことができない。そして避難して話し合う人も欠けてしまっているという状況の中で再建するにはどうするか。そういう問題も出てきます。地域の今までくすぶっていた問題をすぐになんとかしないといけないのですが、震災でなかなかできないでいます。ここ栄村は豪雪地帯で、私は県外から来た者ですから子どもの頃雪の苦勞というのは知らないのですが、雪は恵みと災害、災いがお互いを行ったり来たりするという、受け止め方はいやでもなく、よくもないと考えています。しかし、お年寄りの方のほとんどは苦勞していますので、この際雪のない所に出たいという声が非常に多いんです。ですから、雪をマイナスとして受け止めて育った。そう育ったものをそのまま背負い込んで、こういう震災であぶり出されて、それが一気に出て、ここから出たくなってしまおうという声が多かったのですが、結局出た方は少なかったです。なぜ出た方が少ないかというと、お隣近所の安否確認もそうなんです、結局栄村の良さというのは、おかずまで分かってしまうというお付き合いですから、居心地がいいというか、ある程度長屋の生活みたいなもの、非常時に何かあった時に頼れる近所といいますか、そういう仕組みが出来ています。避難して村を出ますとお隣さんと話も出来ない。お茶も飲めないというところが窮屈になって、1ヶ月も2ヶ月もいたら、嫌になって帰って来たいという方が非常に多かったのです。そういう意味で、村から出たいという願望が非常に大きかったのですが、実際には出た方は少なかった。今年出た方は80名ぐらいで、これは震災で出たかどうか分からないのですが、実際住民課の数を見ると約80名ぐらいの異動があったということです。その中には震災で出られた方もいらっしゃると思いますが、いろいろな意味で、一番あぶり出された雪の生活という不安、それは若いときはいいんですが、結局年を取ってくると自分ではどうにもならない。やはり誰かに頼らないと生きていけないという生活環境がありますので、その中で村や地域の支援、そしてお隣りの支援、いろいろな意味で「結い」というものが存在していかなければいけないので、私どもでもそんな話をさせていただいて、いろんな支援の形を研究しております。

復旧から復興に向けてなんですが、復興というのはやはりいろんな形で元にもどすことなんです、実際国や県の制度では、例えば田んぼが2枚あった場合、この際だから1枚にして使いやすくしたいということがあっても、復旧ですから2枚を必ず作って、2枚から復興に向けてそれを1枚にする。こういう面倒な手順があります。

復興はこれからなんですが、計画ができましたら、実際に復興をしていくのに、やはりいろいろな意味で核となるものは住民です。社会の関わり方、コミュニティーの在り方、当然皆様方の専門でいらっしゃいます生涯学習もそうですが、社会教育も含めて地域の課題というものをどうやって見つめていくのが問題です。その辺の関わり方も教育委員会が司っているのですが、とても復興については間に合わない。ですから、復興部署

である総合サポートセンターを担うものとして、私どもにも一応声がかかっているということですが。総合サポートセンターと復興推進室で復興がどこまで進んでいるかというチェックをしながら、実際にはもう皆様方が自分たちでなんとかしようという雰囲気にならないと、実際には2,700人ぐらいの村で行政がいくら頑張ってもほとんど無理です。ですから地域社会に関わっている皆さん一人一人が結いの心でやっていかないためなのです。

(スライドを指して) これは薪を片付けているボランティアの方ですが、玄関が壊れてしまった住宅で、雪国ですので玄関先に積んでいた薪を片づける、というこうした仕事もお願いしてやっていただいています。私どもでは、ニーズが発生するとその仕事を説明する時には、「こういうことをやっているけど、よろしいですか。」と確認をもらいながら全部仕事をやっていただいています。大学生も支援に協力いただきました。信州大学では農援隊と称しまして、農学部の学生、先生の皆さんからの支援がありました。信大では朝早く出る人を送るためのボランティア朝ご飯隊があつて、それを食べて来て栄村を支援するという組織がありました。いろいろな意味で私どもはお世話になっています。支援も様々な形があります。それからもう一つ、小学校の子どもが被災しましたが、5年生は総合学習の中でボランティアというものに触れたいということと、支援活動をしたいという申し出がありました。こんなことも活動の中でありました。

(スライドを指して) これは座談会です。これは駅前の活性化について話し合っているところです。これは小学校6年生の総合学習で、子どもたちが私どもの事務所に来て、ボランティアの受付からの流れを学習しました。子どもたちは最後に発表会を行い、仮設住宅の皆さんにお集まりいただいて、お守りを自分たちで作って、それを一人一人に「長生きをしてください」と渡しました。これは子どもたちの発想なんです。子どもたちは自分たちの思いをお守りという形にして渡しました。出来すぎるくらい出来過ぎた話なんです。私も1個車に置いてあります。子どもたちも被災者なのですが、1年間やってきて、学校の先生の指導もあったかもしれませんが、被災している人たちへの真心をプレゼントするということが出来たということでもらった方は本当に嬉しかったと思います。

(スライドを指して) これは、また別の子どもたちですが、震災を受けて学校のプールが使えなくなり、夏休みの間子どもたちを仮設住宅の中で留守番をさせておくわけにはいかないとお母さんから相談がありました。学童保育的なものとして『結い』で預かってもらえないかという話がありました。ところが、通常の学童保育は皆さんご存じのように、小学校1年から3年までが国の対象ですので、村は1年から3年の学童保育は受け付けるんですが、4年から6年はやらないのです。こういう状況ですので、片方は学童保育をさせ、片方は留守番させるわけにはいかないという話で、たまたま村への申込がなかったもので、私どもで1年から6年の子どもを預かることにしました。大変子どもたちには喜ばれました。これには、武蔵野大学の学生達がメニューを全部考えて、20日間くらいやっていただきました。大人は一緒かけっこなんかしないのですが、この学生達は一緒に汗を流し、子どもたちと一緒に目線で遊んでくれるので、子どもたちが非常に喜びまして、終わっても「明日から来てもいい?」と言ったり、半年経ってもお母さんから「また来年やってくんないかな、お母さん」と子どもが言っているという話を聞いたりすると、子どもたちには通常の夏休みよりも印象が強かったようです。「来年もやってくれませんか」とい

う話になっています。

(スライドを指して) これはもぎたての胡瓜を食べる学生です。地域の話を実地で聞くのですが、その中で農業に携わった方は、「おれの昔の農業は」という話になります。それである人は「栄村の農業では食べねえんだ」などいろいろな話をします。一番感心したのは、全部で2,000~3,000mの側溝を先人が掘って今でも守っている。それを掘る時は水平器などなかったの、その水平器をどうしたかという話になる。夜になって提灯を下げ対岸から見て提灯の高さで印を付けて平行をつけるんだという話をしたり、一升瓶を横にして水平を見るというような話を学生にするわけです。そうするとそこまでして農地を耕したかったという農の心という話が出てくるわけです。ここに生きた学習があって、すごい話になってくるので、学生はワクワクして、大学では学べないようなことがゴロゴロしています。

(スライドを指して) これはこんにやくを掘っているところです。掘る方も、支援と支援というのが、最初はぎこちないんですが、終わる頃には非常に仲の良い関係になってきます。先ほど言った『結い』の鉢巻き、白いタオルがかかった人は千葉からのIターンの方です。この方がすごい人で、40cmぐらいずれた家をジャッキアップで直してしまうのです。これは「俺なら直せるよ。計算するからちょっと待って」と言って計算して、ジャッキのトン数を決めます。必要なジャッキを用意して、作業の開始です。動かすとバキバキバキと家中が音をたてながら、だんだん立ち上がっていくんです。われわれは、できあがった後の基礎の打ち直しのコンクリート運びなどをお手伝いしました。結構よそから来た人の方が頑張っているのかなと思います。

地域の集落の中では祭りというのは非常に重要になります。ここに大学生を入れまして、地域の成り立ち、維持ということでは祭りがどういうふうに作用しているか学んでいきなさいということをやりました。レポートについては私どものホームページで紹介してあります。そばを蒔いてそばを作って食べるということも『結い』でやりました。これがそれを紹介した新聞です。

ちょっとこれは余計なことなんですが、義援金ですが新潟県の津南町というのが出ています。津南町は2,200万円しかもらっていません。栄村は目と鼻の先で、10億2千万円もらっています。これだけ違っているのは「なぜ？」ということになります。やはり社会のとらえ方、マスコミや情報発信といえますか、そういうことでかなり差が出てきます。逆に意図的に新潟県は風評被害を避けて、不安材料を出さないという状況もありました。私どもは活動支援金を頂いて一切をやっております。

栄村復興支援計画策定については、私どもも委員になって策定に関わっています。委員会の中で私が触れたのは、公民館という軸をやはり大切にしていこうということです。(スライドを指して) これは秋山郷で、私が住んでいる地域です。私はここで、一人のためのサンタさんを務めました。保育園の園児が一人しかいなかったのです。これも私どもの復興支援の一部と考えています。(スライドを指して) これは中学校の花壇ですが、環境美化委員が5人しかなくて、少子化でとても花壇なんて維持できないので、外からの応援を頂いたということです。

そこに住んでいる人は、何があってもそこに住みたいと考えています。ふるさとの再生をしたいということが基本にあります。栄村もそうなんですが、公民館活動というのは大

事で、その中で社会教育、社会福祉、生涯学習を通じて地域の活性化と自立の道をサポートしていくことが大切と考えます。

今回の私どもの地震は、交通事故に遭って瀕死の状態で、「輸血」というのが復興支援に当たると思います。しかし、いつまでも輸血に頼るわけにはいきませんので、自らの力で自らの血を作らなければなりません。私は「自助、互助、共助」という気持ちを思い出すことが必要と思います。私はいつも言っているんですが、命というものは必ず返さなければいけない。返す時は利子をつけて返すのが社会貢献というもので、今まさに私がやっていることで利子を払っておいて、ゆっくり命を返そうかなと思っております。ボランティア社会というのはこれから盛んになります。社会教育、学校教育、家庭教育があって、全体の社会の中で地域を守っていくということができないかずっと悩んでいます。ボランティアは社会学習であり、生涯学習であり、そういう方達がこれから家庭を持って行って、そして子どもを育てる学校教育にも関わっていくというような形、これが社会全体で必要だと思えます。そういう意味では復興は、やはり人々の健康というものも考えながら、健康を維持する為に食べることでなくて、精神的な栄養をどうやって地域から、そして地域へ発信していくか、それが栄村流であるべきだっていうことをこれから学んでいきたいと思っています。また皆様にご指導いただきたいと思っています。ありがとうございました。

(土井会長)

一人だけ質問を受けたいと思います。どうでしょうか。

(木下委員)

公民館の話は「なるほどなあ」とお伺いしました。前高橋村長さんのお話は、何回かお聞きして、田直しとか道直しの話もなるほどと思って聞いていたんですけど、今回の復興の取組の中で一つお聞きしたかったのは、栄村にお住いになっている若い人たちというのは、どのような形で復興の取組に関わっていらっしゃったか教えて頂ければ助かります。

(相澤博文復興支援機構『結い』代表)

大変痛いところですが、実際復興計画のタイトルは、「子どもの元気な声をする村にしたい」という、そういうタイトルで復興計画を策定するということになりました。現在は若い人というのは少なく、若い人が住みにくい状況があります。I ターンの若い方が1、2名いらっしゃいますが、仕事もないということで、非常に住みづらいとは思っています。お母さんとの座談会をやって、これは若い人のグループになるかと思いますが、私どもで「新しい公共」のモデル事業というものを請けました。座談会をいくつもやったんですが、その中でお母さん達がやはり、お母さんたちの時代とは違う考え方が非常にあって、自分たちの思うようにいかないという思いはお聞きしました。若い人たちは「普段の生活」と言いますか、子育てで一杯、自分の仕事で一杯、その中に「これをやる、公民館ではこれをやる」という活発な方がいるかというところではなく、非常に活気が少ないです。今、復興では若い力がどうしても必要です。結局、結いの心というのも、お隣近所助け合うにしても、若い人がいないと地域というのは成り立っていかないんです。消防団もそうですが、どんなことがあっても、子どもがいないともっとひどいです。社会福祉協議会と毎月1回、

ある地区で支援が届かないような方を集めてお茶飲みサロンをやっているんですが、やはり若い人がいない、お年寄りだけ、お年寄りは近所の人の顔が見たくても見られない。孤独の塊になってしまいますので、その人たちをどうするのかということになると、若い人が入らないといけない。私ども4月から復興支援を扱って、復興支援の若い人たちを地域に送り込んで活性化を図ろうということで、まずは復興支援の形から、若い人を地域に入れていきたいという考え方があります。しかし、本当は若い方が少ないというのが実態です。

(土井会長)

相澤様、ありがとうございました。

### 3 現地視察①・意見交換

(小滝公民館)

「集落公民館の震災対応・復興について」 小滝公民館長 中沢 謙吾 氏

(土井会長)

それでは審議会を再開したいと思います。

復興された小滝公民館で、集落公民館の震災対策・復興について、中沢小滝公民館館長様よりご発表いただきます。それでは館長さん、よろしくお願いします。

(中沢小滝公民館長)

私は小滝公民館館長の中沢謙吾と申します。どうぞよろしく申し上げます。今日は本当に遠い所小滝公民館までお越しいただいてありがとうございます。まず今回の震災に当たって本当に多くの皆さんにご支援や励ましの言葉等いただきましてありがとうございます。どうにか1年8ヶ月経って、ここまで歩んでくることができました。本当にありがとうございました。

私の方から、この建物の復興に当たってのお話と震災当時のお話しもさせていただきたいと思います。昨年の3月11日、皆さんもご存じの東北の、東日本大震災がありました。その13時間後、栄村を直下型の震度6強という地震が襲いました。ちょうど12日の3時59分ということで、皆寝静まっており、夜明けにしては少し早い時間でしたが、震度6強という地震はものすごいものでした。私もベッドで寝ておりましたが、揺れが収まるまで全然起きられない状態でした。ちょうど街灯等の光が、停電にならなかったもので、家の中の様子を見ることが出来ました。もう地震が止まってくれるのを祈むような状態の中で、家の中はめちゃくちゃになり、外に出るしかない状態で、家族を連れて外に出ました。家の中の壁は落ち、家具も全部バラバラになりました。震度6弱ぐらいの余震が2度来まして、このままだと家が潰れてしまうということで、集落全員が屋外に避難しました。この小滝公民館が第1避難所に指定されていたのですが、建物が傾いてしまい、サッシが全て下に落ち、壁も落ちていたので、避難所として使えるような状態ではありませんでした。区長さんを中心に、すぐ近くの比較的広い場所に集まっていたので、どうしようかと色々相

談しました。集まった時はまだうす暗く、雪も2メートルぐらいある、寒い早朝でした。どこか建物の中に入る所はないかと相談しましたが、一般の木造住宅は家の中が壊れたり、散らかったりして入る所がないということで、やむを得ず共同の鉄骨の車庫へ避難しました。そこならば余震が来ても壊れないだろうということで、全員でそちらの方に移動しました。子どもやお年寄りも寒さでもう耐えきれないという状態だったので、出せる車はみんな出していただいて、車の中へ子どもたちやお年寄りは避難していただきました。すぐ全戸の安否確認を行い、全員一応無事だということが確認されましたが、お年寄りの中には動けない、家から出て来れない人もおり、このまま家がつぶれると大変だということで、何人かで行って救出をしました。その後9時頃に、みんなで食べるものを持ち寄って、朝飯とも昼飯ともつかない食事をとりあえずしようと待っていたところ、11時に全村避難指示が出され、栄小学校へ避難するように指示が出たのですが、地震で山に残っていた雪が全部道路に落ちてしまい、道路が完全にふさがれてしまいました。これではお年寄り等連れて行けないということで、急遽京都府と大阪府の防災ヘリコプターが東北に行く途中でしたが、こちらに回っていただいて、栄小学校の方へ全員空輸していただきました。栄小では小滝集落は一つの教室に全員入っての共同生活が始まりました。幸いに教室ですから暖房があり、赤十字から毛布等を頂いて非常に暖かかったのですが、暖房をつけた密閉空間で人が動くともものすごいほこりが舞います。その中で夜寝るので、埃と空気の濁りで皆さんすごく咳をするんですよ。これはまずいということで、お年寄りは早い段階でいい環境の所を手配して移っていただきました。教室に残っていた方々は3日程で、全員咳をして軽い風邪引き症状が出始め、夜はマスクをしないと寝られないような状態でした。10日間くらいの避難生活を小学校で送り、その後避難解除になりましたが、家が壊れてしまい約半数の方が自宅へ帰れませんでした。その方々はそのまま避難生活を続けたり、飯山市など村外の住宅を提供していただいた所に移るなど、集落から外での生活を余儀なくされました。そのような中で、集落の輪から孤立していつてしまわないように、ひと月経った段階で全員小滝へお茶を飲みに来ようという企画をしました。4月24日に開催をし、少しでもつながっているということを伝えられればという思いでした。それ以降は6月に竹の子狩りを実施しました。

資料2には、小滝公民館の平成22年から現在までの活動状況を総会資料等から抜粋したものが載っています。昨年の場合とはとにかく最小限でもいいから、活動を続けていこうという中で、竹の子狩り、お祭り、古道歩き、中越地震・中越の視察、あとは新年会、道祖神等に絞って開催しました。

栄村の公民館の中で全壊だったのは、青倉公民館と小滝公民館でしたが、小滝公民館がなぜ再建できたかという点、もともと下高井農林高校の古材を持って来て、非常に大きい柱や梁等の材料で作られていた事と、基礎がブロックだったので、ブロックが全部壊れて、それによって免震構造の様な状態になっていました。それで建物は傾いたのですが、ブロックが全部バラバラになったため、上の建物は比較的そのままでした。だから基礎を完全に作り直せば上屋は何とかなるのではないかという建築屋さんのアドバイスを基に、基礎工事を専門家の建築屋さんに依頼しました。1階を小会議室、卓球などの小運動場みたいに使っていたのですが、消防のポンプ小屋も壊れてめちゃくちゃになっていたため、1階をポンプ小屋に改造することにしました。あとは自分たちの手でな

んとか修復しようではないかということになりました。というのも、この地震は生活しているあらゆるものに影響を与え、住宅、納屋、道路、畑、お墓、公民館、車庫、お宮類が小滝のほうには4つもあるのですが全部壊れてしまいました。それらを全て復旧させるのは、お金も労力も莫大なものがかかって、一気ににはできませんでした。しかし、公民館というのはどうしても集落の集まる、集う場所、何の会議にしるここで皆が集まってやるという場所です。ここがないとこの先いろいろと話をしたり、対策を練ったりするにしても、どうにもならないということで、ここだけは早急に復旧させる事になりました。そのために、限られたお金の中でやるにはこの建物の内装を自分たちでできるのではないかとということで作業を行いました。あとはDVDを見ながら、説明していきたいと思いますが、よろしくお願いします。

(DVD 震災直後から撮影した写真を映しながら)

住宅の全壊は3戸でした。半壊が7戸です。一部損壊と言ってもかなりひどい壊れ方でした。これは本当に地震の直後です。まだ周りは暗い状態です。これは私がやっていた牛舎ですが、当時2メートルぐらい雪がありましたので、道路の脇の雪は全部道路に崩れて落ちて通れない所が各地にでました。道路のアスファルトにヒビが入ったり、持ちあがったりもしました。これも地区内道路なんですけど、雪がみんな道路に落ちて通れない状態でした。これは区長さんが中心になってこれからどうしたらいいか話し合っている様子です。これは小滝に来る道路が全部雪で埋まっている写真です。これはヘリコプターで運んでいただいた時のものです。これは小学校での避難生活の様子です。車庫も傾いて、家の中もこの様な状態です。お墓も全てこの様な感じですよ。これはヘリポートを作った時のものです。雪の表面に、亀の甲羅のように亀裂が入っています。これは少し雪が消えてからの映像です。これは1ヶ月半ぐらい経って、公民館の中、壊れている所を片付けて、とりあえずみんな集まろうという小滝の集まりを開いた様子です。サッシが全て外れていましたので、雨が入っていましたが、曇を起こしたり、みんな顔を合わせてほっとしている。雪が消えたら、地震の爪痕があちこちに様々な形で見えてきました。去年は小滝の田んぼの7割程が作れませんでした。途方に暮れているおじいちゃんたちです。道路がこのような状態になりました。春からボランティアの方に大勢来ていただいて、片付け等の仕事から春の水路普請という事ですが、それらをボランティアの人たちに非常に助けて頂きました。これはその時の写真です。とりあえず、作れる田んぼや畑だけでも作ろうということで、春になってから作付を始めました。それまでずいぶん憂鬱な顔をしていた人たちも、春の山菜取りや作業が始まると元気になってくれました。やっと我を取り戻したような感じで春を迎え、作業をみんな一生懸命しました。これは仮設での生活の様子です。これは時間がたってから傾いていた建物が壊れたところで、既に取り壊しになりました。被害は凄かったのですが、植物やそういうものは、季節になるとちゃんと花を咲かせたり、葉っぱを広げたりして皆さんの気持ちを和ませてくれました。これは6月、うちのほうでは田休みといいますが、その時期に竹の子狩りをみんなで集まってやっているところです。ボランティアに来た人たちも大勢呼んで賑やかなものになりました。夏になってくる頃から、ようやく壊れた建物の解体とかそういうことが始まりまして、集落の中でも家がどんどん無くなっていくという状況になりました。これは紫陽花の手入れをしているところです。お祭りも大変なのでやろうかやるまいかいろいろ議論をしたのですが、やはりお祭りはなん

とかやろうということで、村から出ている人たちも帰って来ていただいていたので開催となりました。解体が進む一方、建物は一部しか作っていないため、雑草だらけになっています。これは、いよいよ公民館の修復が始まるところで、建物の中にあるものを全部移動したり、落ちかけている壁を剥いだり、そういう作業をしているところです。一旦骨だけにしました。お宮の修復も始まっています。この正面の家も取り壊しました。こっちの家も取り壊しました。この小滝では震災前から古道の復活ということを行っておりましたので、秋になってからは古道をみんなで歩いて行こうと、古道歩きの会を計画して大勢の人に集まっていたいただきました。1軒古い古民家をなんとか残したので、そこでお昼をみんなで食べている様子です。これは道祖神の準備をするということで、萱をみんなで刈っているところです。いよいよ11月になって、内装を自分たちで取組始めているところです。まず下地に構造用合板を貼って、道路とか田んぼのほうの復旧工事がいよいよ本格的になる中、なんとか元旦の日に間に合わせようと、急ピッチでみんな夜、仕事から帰って来て、公民館で板張りをしているところです。最後の仕上げは地元産の杉板を使って、内装を仕上げています。最後にお年寄りから子どもまで来ていただいて、最後の塗装だけは全員でやろうと、かなり大勢の人に来てもらって最後の塗装をやりました。その時の気持ちをこの部屋の一角に書いてあるのですが、みんなメッセージとして残そうということで、その時の気持ちを書いていただきました。畳まで敷いてお茶飲みをしています。何とかぎりぎり元旦に間に合いました。いよいよお正月です。お正月、この冬は雪が多かったです。しかし、正月1日はものすごくいいお天気で、本当に良い元旦を迎えることが出来ました。小滝恒例の元旦というのは、みんなでおめでとうをやった後、ゲームをやって、その後宴会で和気あいあいとします。これはゲームをやっているところです。伍長というのは4伍長ありまして、伍長対抗で毎年行います。結構力が入る、熱が入るのです。ゲームが終わって、いよいよ宴会に。これは1月15日の道祖神です。この日も良いお天気で、素晴らしい道祖神になりました。毎年一番盛り上がるのはみかん投げです。だいたいこのような流れで取り組んできました。

(DVD終了後)

小滝では地震直後から、被害が大変大きかったので、小滝からかなり大勢の人が地区の外の、仮設や飯山等に住居を移動しました。そのため、村の復旧に当たって取り組む人力が足りず、急遽震災直後から小滝復興プロジェクトチームという組織を立ち上げました。通常区の役員体制なり運営というのは、区長さんが中心に、各家から家長が集まって、ものごとを決めていたのですが、このプロジェクトチームは1軒1人ということではなく、動ける人は全員ということで、若い20代の人たちから組織を作って、その中で作業分担しました。いくつかのプロジェクトに分けて取り組んできました。そのおかげでいろいろなものごとを進めるのがスピーディーにできたと思っております。地区から半分の人たちが出て行った状態で、どうやってその意思の疎通や状況等を伝えるか。それを回していただければ分かるのですが、小滝通信というのをプロジェクトチームで作らして、それを地区の外の人には郵送したりして配りました、現在15号まであります。この様に外に出ている人とのコミュニケーションを取って来ました。

それでは先ほどの資料の中にもあると思いますが、去年はそういうことで最小限のみんなの集う場所ということで行事を行いました。今年は公民館とプロジェクトチームのほう

で共催する形の中で、いくつかの新しいことに取り組んできています。その辺りは、また見て頂きたいと思います。私の方からは以上になります。

(土井会長)

ありがとうございました。ほんとに村の人が全員で、子どもたちも仕上げのペンキ塗りをされている様子をお聞きして、すごい力だと思いました。では時間もありませんので、皆様から質問・感想など一言お願いしたいと思います。

(北林委員)

私もDVDを見せて頂いて、若い方もお年寄りも子どもまでみんな一緒に同じように作業をしていることに驚きました。私は小さいからやらないとか、言いたくなると思うところですが、みんなの場所はみんなで作ろうというところに表れていて大変感動しました。

(山崎委員)

公民館報の「あちゃ」ってどういう意味ですか。

(中沢公民館長)

「あちゃ」って掛け声みたいなものです。方言なんですけどね。

(山崎委員)

みなさんご覧になると分かりますが、頭に「あちゃ」って書いてあるんです。正直、私は松本に住んでいるんですが、歩いて5分の所に公民館があるんです。何をしているのかよく分からない。公民館がたまに大正琴か何か鳴っている時があるぐらいで、あと夜中におばあちゃんたちがカラオケをやっているのが聞こえるくらい。それ以外これといった活動はなかなか進まないようで。今近所に住んでいても公民館ってあまり行かないので、ここではそうではないということで、不思議に感じました。

(土井会長)

はい、ありがとうございました。それではまだまだあると思いますが、次の会場も待っていますので終わりにしたいと思います。

#### 4 現地視察②・意見交換

(栄小学校)

「小学校の震災対応・復興及び自然学校の取組等について」

栄小学校長 渡辺 要範 氏

(土井会長)

「小学校の震災対応・復興及び自然学校の取組等について」栄小学校の渡辺校長先生からご発表いただきます。

(渡辺栄小学校長)

私はこの4月より栄小学校にお世話になっております。教頭も同様でございます。2年目の今年でもいろいろなことがあって、大変だなと感じているところでございます。昨年度の先生方のご苦労は如何ばかりかと、本当に頭の下がる思いでおります。

昨年度の様子をまとめた「大震災を乗り越えて」の資料をもとに、24年度分を付け加える形で、震災の様子を発表させていただきます。なお、当審議会の主旨にそぐわないところがありましたらお許してください。

昨年の3月12日の朝4時に地震がありました。これは当学校や一番ひどかった青倉地区の様子です。平滝という子ども達の通学路として使われていた場所です。これは学校のとなりの住宅ですが、大きな被害がありました。家の中のようです。学校の中の様子ですが、ひっちゃかめっちゃかな状態ですが、特別なことではなく、どの家でも同じ状態だったと思います。学校ではどうであったかということ、先ほど見ていただいた頑丈な下駄箱ですが倒れていました。職員室はめちゃくちゃ、図書館の本はみんな倒れてしまいました。もちろんパソコンもそうです。体育館も被害に遭い、卒業式ができないという状態になりました。

資料(資料3)の1番にありますが、地震が起きたのは3月12日土曜日、土日と過ごして3月14日には北信小学校も東部小学校も終業式を行うという計画でした。そして、火曜日には卒業式と閉校式を行うという予定で準備が整えられていました。直前に、このようなことが起きました。卒業式と閉校式については、3月24日に校舎は避難所として継続して使われる中、オープンスペースを使って式が行われました。そして、2校が統合して栄小学校が4月5日に発足する予定でしたが、これも1週間延期して4月12日に栄小学校が出発いたしました。この4月12日の朝も、震度5弱の地震がありました。

話は戻りますが、3月12日から北信小学校は避難所になりました。教室やオープンスペースに200名を超える人が避難してきました。私は横倉地区に住んでおり、避難所暮らしもさせていただきました。そうした中、ニュース等でも報道されましたが、避難所暮らしでは、トイレも届き、電話も引かれ、支援物資も豊富で、近隣市町村の本当に手厚いご協力を得て、ボランティアの方々にも助けられて、3月末日まで避難所にいさせていただきました。私も昔消防団に入っていたのですが、消防団は飲むばかりで地域の皆さんに非難されることが多いのですが、このときばかりは消防団の皆さん、24時間体制で近隣の消防団の応援を得ながら、本当に村のために頑張ってくれました。特に、第1避難の時に「あ、いけない。ガスの元栓を閉めていない」などと心配した時に、消防団の人が、一軒一軒回って、ブレーカーを落としたり、ガスの元栓を閉めたりしてくださって、「心配ないよ」と言われてみんな安心したということもありました。数々の応援メッセージをいただいて、心強かったことを覚えております。先ほども申しましたけれども、避難所生活しているときにも度重なる余震がきました。まずガチャガチャと音がします。お年寄りの方が子どものような悲鳴を上げて、「神様神様、なんで私たちだけ、もう勘弁してくれ。」とお祈りしている場面がありました。この小学校も、避難中何本か蛍光管が揺れて落ちる被害がありました。サッシ戸のガラスは一枚も割れませんでした。普通の家は窓ガラスが割れていました。

ので、「学校って安心だな」という声も聞かれました。

そして、避難指示が解除された後どうなったかといいますと、資料の3に書いてありますが、被害が軽い家は帰れたのですが、直さなければ帰れないもの、全壊のもの、そういう人たちは、飯山や津南に家を用意してもらって引っ越しました。親戚の家に身を寄せる方も結構いました。そうした生活が仮設住宅のできる6月まで続きました。仮設ができると仮設に移転します。その中で自宅を自力で作る方が、今年の7月ぐらいからぼちぼちと出始めて、一人二人と仮設を出て行く方がありましたが、11月末に復興住宅ができまして、そちらに移り住んで、今4世帯だけが仮設で正月を迎えるようですが、当校の子どもの家庭、1家庭も仮設住宅におりますが、住宅事情もこのように変遷してまいりました。学校の校舎や施設ですが、グラウンドの3分の1強でひび割れが入った状態になりました。大きな亀裂がいっぱいありました。真っ先にグラウンドを直していただき、昨年8月下旬に復旧しまして、第1回栄小学校運動会を実施することができました。体育館は24年3月末に使えるようになりまして、23年度の栄小学校第1回の卒業式を体育館で行うことができました。間に合うように進めていただきました。校舎等の周りですが、資料のように亀裂が入りました。かなり深い亀裂が走っていますが、この工事も足場を組んで隅から隅までやってもらいました。そして、この足場は24年4月1日にすべて外されました。プールですが、今年6月下旬に復旧して7月2日にプール開きを行うことができました。昨年度はプールがなかったものですから、ここからマイクロバスで20分程のところにある飯山市岡山小学校という学校があるのですが、そこに連学年ごとにスクールバスで行って、体育の授業として水泳をしました。今年からプールが使えるようになりました。最後の工事は、体育館の外壁と屋根だったのですが、それが完成したのは8月下旬です。9月の第2回の栄小学校の運動会は、このグラウンドできれいな校舎を前に実施することができました。この工事を終えて学校の工事はすべて終わることができました。

その中で、いろいろなご支援をいただいております。造園組合の皆様は、学校に素敵な花壇を作っていただきました。延べ40人ぐらいで、1日半かけて作っていただきました。大学のピアノの先生のリサイタル、朝日村朝日小300名近い子ども達が、一人一枚ずつワンピースずつ絵を描いて1つの大壁画を作っていただき、ご支援ご協力をいただきました。測量組合の皆さんは、最新のGPSで測りながら、きちんとした基準点を作っていただきました。重量挙げ銀メダルリスト三宅さんは、来て励ましてくださいました。お笑い芸人の方も来てくださいました。

「ご支援いただいて本当にありがとうございました。もう私たち元気ですよ。」ということ発信したいということで、6年生、児童会が中心になって村民の今の写真を1,000枚を目標に撮って、それを組み合わせてモザイクアートを作りたいと進めているところですが、その想いとSBCの企画が一致して、SBCの方が来て、ギャグで住民の人を笑わせて、その時の写真を子ども達が撮るといような案配で、夏休みとかに何回も足を運んでもらって進めました。そして、出来たのが「栄村は元気です。ありがとう。」というもので、村民の笑顔一枚一枚で出来ているのですが、私たちが撮ったのは1000枚ですが、それだけでは足りなくて7,000ピースの顔写真で、1年生5人の笑顔を表して発信しました。なおも支援は続きます。パティシエさんのグループの皆さんなどが来てくださり、出前授業をしてくださいました。松本山雅の長野県にゆかりのある選手2名を中心に、サッカー教室を開いて

いただきました。そういうことで私たちもありがたい支援なんです、こうした支援がいっぱい来ますと、先生方もこうしたことばかりしていいのか、せっかく真心持ってきていただく皆さんをむげに断れないので、時間を区切ったり、あるいは、内容を授業として成立できるようにしてもらっています。サッカー教室やASIMO(アシモ)君もそうですが、特別授業ということでやってもらうように整理をさせていただきました。なおも支援は続きます。こうした支援を受けながら2年目が動き出しているのですが、1年目はPTAなどいろいろな行事が先送りになって、今年始めたということも出てまいりました。そうした中で小学校の統合という問題が出てまいりました。いままでは統合どころではないとあたふたしていたのが、落ち着いてきて学校生活がみえてきますと、統合した問題がでてきます。不公平感だかと、今までの学校はこうだったのに、新しい学校はこうなっちゃうなど、いろいろなものが噴出してまいりました。でも、まずはやってみてそれから考えてということで、この1年間進めてまいってきております。そういうことでようやくいろいろなことができるようになりました。地元の公民館の館長さんが、絵手紙教室を行ってくれています。全校および各学級で1回だけではなく複数回来ては、絵手紙の勉強をできるようにしていただきました。

「エゴマの会」という女性の会がありまして、郷土食のあんぼを作っていますが、2年生の生活科の中であんぼ作りのお手伝いをしてもらっています。これも複数回来ていただきまして、2年生は上手にあんぼを作ることができました。5年生は米作りをしていますが、米粉を作って、やはり「エゴマの会」の皆さんに教えてもらって料理づくりに挑戦しています。全校でそばの栽培をしています。横倉の敬老会の皆さんにお願いして行っているものです。種の植え付け、刈り取り、そば作り一気に出来ませんので、3日に1回来ていただきました。低学年で取り組み、そばを打ち食べました。延べ70人が学校に足を運んでいただきました。大きな活動なんですけど、また続けていきたいと思っています。残念なことにそばは連作ができないので、来年そばをつくる場所を探しているところです。

地震を終えて、私たちはこんなに貴重な経験をしたのだから、防災に対しても、地震に対しても、先進校でありたいという気持ちは持っています。まだ具体的に取り組みをお示しできないでいますが、緊急地震防災システムが今年長野県に10校入るということだったので、真っ先に入れていただきました。防災アドバイザーの方も来て、いろいろ教えていただきました。地震の時ここならば身を隠せる。理科室や調理室というところでは、どのように安全を確保するのか、場所場所によってどう対応したらいいのか、子ども達にきちんと教えていかなければいけないと思っております。

アドバイスを受けまして、そのような教室にはいただいた支援金の中から防災頭巾を購入しまして、20ずつ置くように整えています。また、避難訓練をやりながら、活用できるようにしていかなければいけないと思っております。

また、いろいろな支援の中で子ども達の心のケアについて、緊急スクールカウンセラー事業として、23、24、25年度の3年間、スクールカウンセラーを派遣していただいています。月に1日、丸一日子ども達の相談、親たちの相談に取り組んでいただいています。とてもありがたく子ども達も元気になってきています。

子ども達は、地震の経験を経て、音や揺れについて過敏になっている児童が3割近くいます。お母さん方も、ちょっとしたことに怖がってかわいそうという方もいます。

そして、こうした地震体験とともに、学校の統合による新しい人的な変化、これは子ども達にとって地震を越えた大きな負担になっているようです。この件につきましても子ども達が安心して生活できるようにすすめていきたいと思います。

(栄村教育委員会 生涯学習係 島崎さん)

続きまして、「栄村自然学校」について説明いたします。「栄村自然学校」は、年7回ほど行っている子ども達向けの自然体験の取組です。地震直後にはいろいろな活動や行事を中止する中で、子ども達の心のケア、地震のショックから村中が壊れた道、壊れた家、避難所生活、学校生活に戻ったとき、先ほど渡辺校長先生からも説明がありましたように、統合によって教室の雰囲気も変わっているという状況の中で、自然学校を中止にすることはいかがなものかと、震災後の子どもをケアすることをふまえて、環境をできるだけ整えてあげることが大事ではないかということで、23年度も例年通り5月のはじめからスタートさせていただきました。

自然学校の活動は資料(資料3)のとおりですが、自然学校の効果について事務局で感じていることが3つあります。まず1つ目は、子ども達の遊びの変化です。自然の中で遊ぶということをごちからから提供しないと子ども達は自然の中で遊ばないという現状があります。そうした環境をごちからでつくってあげることによって、自然の中で遊ぶ楽しさを子ども達はあまり意識していないと思いますが、学んでいくと感じています。それが郷土愛を育てていくのではないかということをととても感じます。子ども達が自然学校で1回学んだことを実はずっと覚えているということです。例えば、草笛を前回やると、次回もその草を見つけるとまた草笛を吹いている姿を見かけます。結構子どもたちの中に残っているんだということを実感しています。2つ目は、栄村は子ども数の数が少なくなって、現在1学年10名前後となっています。学校生活でも少人数による固定化された人間関係といってもよいと思います。そうしたものを自然学校によって打破できているのではないかと感じています。自然学校ですごいアイデアを出して秘密基地をつくる子がいるんですが、実はその子は学校ではしょっちゅう叱られていて、周りの子は余りにも素晴らしい基地を作って、周りの大人やリーダーがほめるもので、「でもね、あの子学校では叱られているんだよ」と言ってくるような人間関係を、ちょっと違った視点からその子を見てあげるといことを提供できるのかなと感じています。3つ目は、中学生、高校生、一般の栄村民と言いましても20代の若者がリーダーになって子ども達の班活動やキャンプの計画を進めています。こういうことを通して、大人の言うことを聞かない子ども達も、中学生や高校生に言われるとよく言うことを聞いて活動がスムーズに進むということがいくつもあります。リーダーにとっても、自分のためではなく、子ども達が楽しいキャンプ、楽しい時間が過ごせるために、自分は何をしたらいかが考える時間を持つ、そうしたことが社会貢献やボランティア精神につながっているのではないかと思います。

これからも生涯学習係としては、こういった子ども達の心のケアとか、学校生活では採り入れられない友達の違った視点から見るといったことを、自然の環境の中で提供していきたいと考えています。最後に、震災の前と後で自然学校の中で1つだけ違ったことがあります。キャンプへの参加児童が2倍以上になりました。今までの参加者は10人ぐらいで、お風呂に入れないことがいやだったり、わざわざ靴を履いてトイレに行くのがいやだった

りして、参加しない児童がいましたが、昨年度から急増しまして、30名を越えています。

(土井会長)

せっかくの機会です。何かご質問などがありますでしょうか。

(東福寺委員)

私は長野市で活動をしていますが、自然に恵まれた小規模の学校で、和気あいあい皆さんが協力して意思の疎通がきちんとできながら活動していることと感じました。一人一人のお子さんに焦点があたった活動が展開されており、とても素晴らしいと感じております。

(渡辺校長)

少人数で和気あいあいということが多いわけですが、話は繰り返しになりますが、やはり統合2年目ということで、牽制し合うのではないかと思います。和気あいあいで良いとは思いますが、更に伸び伸びという雰囲気には、もう少し時間がかかると思っています。積極的に声をかけて安心させるように取り組んでいきたいと思っております。

## 5 会議

(栄小学校)

### (1) 第2次長野県教育振興基本計画について

(土井会長)

県教育委員会が現在策定中の「第2次長野県教育振興基本計画」について、意見を求められています。時間の関係で、事務局より事前に資料を送っていただき意見を提出しています。それらへの回答を含め、久保教育総務課課長補佐より説明をいただきます。

(久保教育総務課課長補佐兼企画係長)

「第2次長野県教育振興基本計画」について説明

(土井会長)

質問・意見のある方はご発言ください。

(小林委員)

学校現場におりますので、まさにこれからの教育ということで、いろいろと期待されている所が大きいのだろうと思いつつ、日々子どもたちとの生活の中で、何を大事に考えているかというようなことしか、今の段階ではお話しできないと思いますが、お許してください。この4月から私は若槻小学校にお世話になっておりますが、子どもたちと出会った時に、着任式というものが学校ではありまして、そこで子どもたちの姿をステージから見た時に、真っすぐとこちらに眼差しを向けてくれている子どもたち、505名でありました。その感動というのは今でも胸の内にしまっていて、いろいろな困難に遭った時も、あの子たちのあの輝いている目を曇らせてはいけないと頑張るんですけども、そんなお子さんた

ちを学齢まで育てて下さったのはご家庭であるし、そのご家庭を支えてくださっているのは地域だなあと考えています。そういう意味では子どもたちを中心に、家庭・地域・学校というのはきちんとつながっている。そんなふうに思っておりますが、ただ日々の生活の中ではいろいろ価値観も違いますし、願っている子どもへの姿もそれぞれのご家庭で違っている中で、30人なりの集団を一人の教員が、担任ということで小学校ですので、全てを抱えております。そして家庭ともこまめに連絡を取り合いながら、地域の中で生活をするということでもありますので、地域の方たちとも連絡を取り合いながら、かつ、この子一人ずつをどう伸ばしていこうかという願いを持ちながらということで、非常に多忙な生活をしているわけです。そんな中でこの基本計画案の中にもございますけれども、学校への支援をどう体制化するかというあたり期待するところでもありますし、また非常に困難なことだなあとということも実感しています。現実問題、いろいろな課題を抱えているお子さんたちが在籍している中で、学校が主体でいろいろな専門機関であったり、地域の方達においで頂いて、支援会議を日々重ねているわけですが、その中でもやはりそれぞれの人が立っていらっしゃる立ち位置というものが全部違って、そしてそのバックにある機関なり、それから団体なりの思いも全て違って、その違った立ち位置の中で立っていらっしゃる方達が一人の子どものためにどう向き合っ、どう支援していくかということで知恵を出していただいている訳です。そのように沢山のお力をいただいて、学校は助けていただいて、学校は何とかこの子を次のステップに持ちあげていけるぞという実感が持てるのですが、総論としてどんなふうな仕組みになっていくのが、一人一人の子どもたちを輝かせることになるのかなということには、なかなかこれだということが私自身の中では具体が見えていないというのが正直なところであります。学校としては、本当に子どもたちが社会人として、一人の人間として自信を持って旅立っていけるようにということを願って、人は連続性の中で生きているということを忘れずに、過去もあるしそして今を大事にしながら将来につながっていく子どもたちであるということをおもひながら、毎日一つずつのことを丁寧に対応していこうということで精いっぱいなのが今の学校現場かなと思っております。

### (三澤委員)

私は学校教育に実際にはそんなに携わっている訳ではありませんので、事細かなことは言えないんですけども、私の関わっている中で、今小学生、保育園児、それより以下の2歳児、3歳児の親御さんと一緒に指導を体験し、講師として行っているわけですけども、今の親御さんは叱ることをあまりしませんというのが今一番感じていることでございます。小学校に入ったところで、安曇野市は2年生が大豆を作っております、その大豆からお豆腐まで指導しているんですけど、とても統率が取れていまして、とても素直で、お豆腐は嫌いなんだけれども、自分で作るととっても美味しいと言って食べてくださって、素直な子どもになっております。そこまではいいんじゃないかと思うんですけど、私は保護司もしております、高校を中退したりした若い人を何人か指導したんですけど、その子どもを見てみますと、子どもの時に「ああ、この子たちは食生活が大変乱れているんじゃないのかな」ということを痛切に感じております。それと礼儀作法ですね。それがひどく欠けておまして、どこかで狂ってしまったのかしらと思うことを、今痛切に感じてお

ります。計画の基本目標に「知・徳・体の調和」とありますけれども、なかなかこの徳の部分、それから家庭教育の大切さというのが、すごく子どもたちに欠けてきているんじゃないかということ、現在痛切に感じておりました、私たち仲間で教えているんですけど、食の大切さ、それから体験の大切さ、高校生以上になりまして指導した子どもたちに聞くと、何になってやったらいいかと、なりたいものが全然ないんですね。それはどこから来たのかしらってさんざん考えるんですけども、その子の一からの人生を見てきたわけではないので、わからない事だけだったんですが、この中にいろいろ経験するという項目もあります、もっともっと子どもたちがいろんな学習、知識を得るだけではなくて、自分の身で体験してみるということの重要性をこの頃感じております。ですから、学校教育の中にそのことを少しでも入れていただければいいかなと、この頃感じているところです。

(中村委員)

先ほどお話しがあったキャリア教育の推進などに関しまして、私の関わっている立場的なこととか、労働団体という立場からの意見、他にも保育士としてもあるんですけど、そういう意味では学校教育が一番元になっていると思うんですが、就職してからなかなか、若年層とか新採用で来られた方達がうまく人間関係の中で生きていかれないということで、仕事も初めて学校を卒業してきて職種を知ると言うか、仕事の内容を知ることが、そもそもそういうつまづきにもなる原因でもあるかと思うんです。やはり、地域の中で子どもさんやそういう若者たちが役割、地域の中での役割というのが失われてしまっているせいなのでしょう。その辺を変えていかないと、三澤委員もおっしゃったように、そういうところで人間関係とか、いろいろな経験を積んで来ること。また、先ほどの自然学校の話もそうなんですけど、あえて提供しなければというような、これだけの自然の中で遊びを知らないとか、まさかそんなこととは知らないというじゃないけれども、こちらが提供したり、その生き生きとした中で発揮できるというのを知ることが、この村でもあるというのがちょっと驚きだったんです。それは都会だけの話なのかなと思っていましたが、こういうところでもあるんだなと。そういうことをあえて提供していかなきゃいけないし、各地域でそういうものを先頭になって、リーダーになっていく方達がなかなかおいでにならない。やはり私は労働の立場でいくと、キャリア教育にしろ、何かそういうものやっていくのはいいんですけども、中心になってそれに組み込んでくれる方がどなたなのかはっきりしない限りは、どんなにこういう計画を立てて目標値を出しても、企業もそうなんです、一番は仕事をしていくのが当たり前のことなので、その上にそういう方達への指導とか、伝統として伝えていくべきことをやり遂げるにはやはり人的配置がしっかりしていないとだめだと思います。ここで今こそ教育、人づくりに財源をかけて頂かないととんでもないことになるんじゃないかという思いでいますので、ぜひここでやっていく財源の裏付けをして、教育体制の整備がしっかりできるようにしてほしいと思います。

(山崎委員)

特に申し上げることはないのですが、やはり親が子を叱らない、「子を叱るのは学校の仕事だ」というように認識されている親御さんが非常に多かったです。

これは、私が以前量販店に勤務をしておりました時に一番感じたことで、まるっきり教育をされていない親のなんと多いことかということに非常に感じました。親が教育をされていないから、子どもの教育をしない、子どもの教育は学校の仕事だから、私は自分の仕事が忙しくてそんなことをしている暇はないという、非常に短絡した論理で行動をされる親御さん、俗に我々の中では多くいました「クレマー」という態度をとられる多くの方は、やはりそういう傾向が非常に強かったです。

よく広告などで、お一人様何個限りという広告が出ています。そうすると、乳飲み子から全部数えてお一人様5個限り、3人でいますから15個はいただけます。「この子どもさんはお母さんのおっぱいを飲んでいらっしゃるでしょ?」「いえ、この子も一人です。」

確かに人格としては一人だ、という論理を公然と、どこに誰がしようと、私の権利であるという、非常に強力に主張されるお客さんが結構多く、特に若い方に多かったです。それはやはり、私が今の仕事に入る前のことですが、やはりそういう中で一番感じたことは、学校の間で行うべきこと、それから家庭の間で行うべきことの区別が明確にされていない。で、最近読んだ養老孟司さんの本にも出ておりましたけれども、「平等であるということは、基本的に大きな声で言えるわけがないことだ」というようなことを書いたものがございました。確かにそういう部分が、権利の部分の主張はすれども、義務の履行という部分がまるっきり欠落しているとしたら、これの責任はある意味教育の場に戻って来ざるを得ないのではないかなということ、この立場になった段階で勉強をしている最中です。

(北林委員)

私も、もう皆さんがおっしゃっていただいたとおりで、ボランティアで託児をしまして、歴史資料館に勤めているものですから、そこに小学生に「帰りに寄って行っていいよ。」ということをお願いして、小学生ともふれあう機会を何回か持たせていただいております。そうしますと、言葉遣いがまずカチンとくるんですね。「今の言葉遣いはおかしい、こう言いなさい。」と私が言うのですが、「うちのママはそんなことは言わないよ。」というので、「ママは言わなくても、おばちゃんが言う。」とよく言うのです。決して私が厳しく育てられたわけではないと思っているのですが、今の学校の中では「先生はお友達」という印象を、自分の子どもをみてもとても感じますので、それももちろんいいとは思いますが、そこらへんから何となく「お行儀よくしなさい。」という言葉がいうと、「お行儀って何?」というような返事が返って来たりします。そこをなんと私が皆様にお伝えしていいのかわからないのですけれども、そういうところも、学校といいますか、親育てというような部分から入らないといけないのかもしれないと思います。教育とは違う部分かもしれないですけれども、そこら辺を教育という一括りで親から育てていただけるような、親も教育していただけるような形を、生涯学習にも通じてくるのかもしれないと思いますが、その辺もお願いできたらと思います。

先ほどおっしゃっていただきましたように、地域の私たちのような主婦ですとか、おじさん、おばさんも「学校で何かお手伝いができることはないか」ということを、すごく思っていますので、その辺もぜひ地域の力を学校の中に入れられるような機会を作っていたらと大変ありがたいと思います。

(東福寺委員)

今、日本が直面しているさまざまな問題を思いますと、子どもの将来がちょっと不安になります。なぜなら、これらの問題を子どもたちが背負って生きていかなければいけないという問題があるからです。このような時代に、私自身も子どもをどうやって育てていったらいいのか、とても迷っております。

でも、やはり子どもたちの一番の教育者である学校、家庭を大切にしていきたいと思っております。学校での集団生活や、勉強、そしてそれを応援する形のPTA、家庭での基本的な躰、また地域活動など考えればキリがないのですが、子どもが独り立ちできる根っこのところをじっくり考えて行動していきたいと思っています。やはり土台は何と言っても、ここにも書いてありますように、学校・家庭・地域の連携だと思っておりますので、こちらをできるコーディネーター役の方をしっかりと育てていただければと願っております。

(木下委員)

栄村の皆さんは力強く、特に相澤さんのお話の中では、地元の若い人がなかなかいないということだったんですけど、ボランティアとして大勢の学生や高校生が村に入ってきてくれて、その人達の力が大きな力になったんだなあと感じました。小滝公民館の復興の中で、小学生から高校生、そして少し大きな若者達までが一緒になって関わりを持つことで、その集落が元気になるということも教えていただきました。小滝の公民館っていわゆる自治公民館ですが、飯田市でもこうした自治公民館の活動を大学と一緒に調べているんですけど、元気な所で共通しているのはやっぱり子どものこと、次の世代のことをどう育てるかを考えて行動している所は、共通して元気だということはわかってきましたので、私の仕事としても、次世代育成の仕事を中心に据えていくことがこれからの課題だということですが、だんだん見えてきました。次世代を育成するというのは、子どもを育てるというだけではなく、先ほどからの委員の皆さんからの意見のように、大人が子どもとの関わりによって自分自身も元気になったり、変わっていくということが、一番できるのではないかと感じました。

2つ目なんですけど、高校生とキャリア教育の関わりを最近はじめてみて感じたのは、就業体験ということが書かれているのですが、私たちが関わってみると、プラスとして地域のいろいろな人たちとの関わり合いは、すごい力になりそうだなあということが実はわかってきました。高校生というのは、進路を決める一番重要なタイミングのときであるし、就職する子たち、進学する子たちにとっても、この世代に地域が一番関わっていないことは、前々から悩みだったんですけど、実際に関わってみて、高校生達が、地域の人たちといろいろとコミュニケーションをとってみて、少し自分の進路を考える機会になってきたことがあります。今年からはじめて3年生が関わっているのですが、3年生の子が1年生の時からそういうことをやりたかったということを書いてくれたので、就業プラス地域というのが、キャリア教育の総体としてあってよいのではないかと、最近実感として感じております。

3つ目ですが、小林委員から学校への地域の関わり方についてご意見があったのですが、そのことを地域ごとにどう作っていったらよいのか一番の課題で、先ほど説明であったコミュニティスクールという手段があるようなのですが、私もそこを何とか作っていきたく

いう気持ちがあります。地域の人たちは間違いなく子ども達ともっと関わりたいという人が多いと思うのですよ。けれども学校とのコミュニケーションがとれないというのが実態ということですので、そこをどう開いていくようなテーブルを作るのか、そこが難しい課題であり、そこを何とかしたいと思っています。

(土井会長)

私の方からは表記の問題なんですけれども、13ページ、14ページにある「ポテンシャル」とか「キャリア」とか、「プラットフォーム」とかこの言葉はどうなんですか。こういう言葉が先にくると、私は駅のホームかと思っちゃうんですね。だからカタカナを先に書く前に日本語で書いて、アメリカ、イギリスではこの言葉は英語ではこうですよと。反対だと思っんですね。もっと日本語を大事にしなきゃいけない。特に信州教育ということをする時は、そういうよそ者の言葉を借りて言うんじゃないくて、信州の言葉を使って言う。例えば今日の説明の中でも、カタカナの言葉は公民館長さんの言葉にも無かったですよね。「結い」とか。これは昔からあった言葉ですよ。それでちゃんと言葉は、意味は通じるんですよ。ここへ栄村のプラットフォームだとか、そういったことを言ってみるところで、いつから駅が出来たんだというようなものですよ。あとは、「信州教育スタンダード」とかね。どこにガソリンスタンダードができたんだ、いつから長野県はガソリンスタンドぶるようになったんだというようなもので、もっと適切な日本語をきちっと軸にして、そして括弧書きにしてスタンダードですよと、こういうように表記するのがいかがかなと思いました。

(2)「学びの絆で地域力を高める生涯学習の推進」の現状について

(土井会長)

平成21年10月に、この生涯学習審議会長野県の生涯学習の指針で「学びの絆で地域力を高める生涯学習の推進」を提言し、これに沿って栄村ではどのように実践されているかということを見に来たわけです。小滝公民館では館長さんに様子をお聞きして下高井農林高校の階段が未だに使われていることをお聞きしました。子どもから大人まで全員が出て仕上げのペンキを塗りまして、飯山に行った人がまた集まって来られるように行事を行うなど工夫をして今日に至っている。まさに地域の力、地域力を高めるために皆で寄り集まるという姿を学ぶことが出来ました。これからは現在の皆様のお立場で地域の力を高め、学びの絆を深めている現状についてご意見をお願いしたいと思います。

(北林委員)

先ほど、教育振興基本計画の方でお話ししましたが社会教育委員というのは何をしろということがなく、社会教育委員というのは本当に難しく、飯島町社会教育委員の議長を務める方は、「行動する社会教育委員」ということを2年前から言っており、研修なども年に1度は必ず行うようにしています。また、町の社会教育委員として活動する前に、自分が所属する団体がある場合は、そちらの方を活発にすることから始めましょうという事があります。

私は子育てグループを立ち上げ、町で活動を始めました。その後有償託児ボランティアの活動を行ったりしてきました。今は、小学校のクラブのお手伝いに行かせていただいたり、食生活改善推進協議会のグループに入れさせていただき、私より年が上の方々と一緒に活動させていただいています。また、高齢の方の脳トレのボランティアをさせていただくなど、ここ2、3カ月はボランティア中心の生活をさせていただいています。皆様もお聞きになったこともあるかと思いますが、この秋に「イーラみなこい地域博覧会」という会を飯島町、中川村、宮田村、駒ヶ根市でやりまして、そっちの方の実行委員をさせていただいて、何とか町を元気にしようと参加させていただいています。私は、「学びの絆で地域力を高める」という言葉はよくわかりませんが、仲間と「とにかく楽しく色々な事やってみようよ」と話をしています。特に、私より年上の女性が今は元気ですが、何にしましても御高齢になって良い活動が消えていくということを心配をしています。私も同年代の仲間を誘うと「ちょっと仕事が忙しくて」と言われてしまいます。参加している会は82、83歳の方がリーダーでやっていますが、その人たちに言わせればボランティアは忙しい人がするのをのどと言っています。その辺のことを周りの方々に分かってもらって、ぜひ今ある町の中の元気な活動につなげていってほしいと思っています。

自分たちが元気に活動する中に子ども達を巻き込んだり、男性も巻き込んだりする事をしていく。他の機会に話した事もあるのですが、ちょうど私たちの年齢で切れてしまっているところがありますので、婦人会等が活発であった頃の時代を、私たちより下の年代、小中学生のお子さんを持つ年代の方に橋渡しができればよいと思っています。私が社会教育委員として活動をしたり、地域の色々なボランティアに参加させていただいたりする中で、今お話しした事を念頭に活動しております。

(中村委員)

個人的に保育士の立場ではこの学びのところ、一番左の生涯学習と基盤作りの家庭教育の重視、幼年期の家庭教育の重視と答えているのですが、なかなか難しいです。

今の家庭では両親とも大変な働き方をしていますので、しつけ等が行き届かないところがあります。もちろん子育てという点では知識に乏しいお母さん方やお父さん方がいますので、そういった方への子育て応援としては、今は保育所とか託児保育や児童センター、子育て支援センターというところで、通年開放をしています。午前の開放がほとんどですけど、就園しているお子さんたちは、未就学の小さな子どもと関わって遊びを楽しんでいます。

また、手作りおやつ教室や救急法の学習などお母さん達も一緒に学んでいます。そこには、保育士やお年寄りの団体にも世代間交流として講師となってもらって頂く事もありますし、本の読み聞かせではお母さん方のボランティアにお世話になったりしています。音楽鑑賞という点では、地域の中の音楽に携わっている人たちにコンサートなんかもやってもらっていたりします。そういう面では、講師が職員の他は地域の小中学生、ボランティア団体、ママさんクラブ、敬老会と本当に多彩なメンバーがいて、人材の宝庫となっています。そういった人に手伝ってもらって日々の家庭教育に足りない部分を補っていただいています。やはり若者の世代だけではだめですし、高齢者だけでもそういうグループではうまくいかないのでは、お互いに相乗効果ではないですが、若い人がいればお年寄りの方がう

れしくなったりとか、若い小さなお子さんでもバーバ、ジージが来てくれる。そういうものが味わえるとうれしく思います。先ほどは財源を教育行政にかけてほしいと言いましたが、工夫をすれば財源をかけなくても出来るものがたくさんあるのではないかと思います。

労働団体の立場では、地域コミュニティの再生の企業等における活動促進があるのですけれども、私たち連合長野では先ほど男女共同参画のところで色々な子育て支援をやっている企業を応援しています。今年は色々な子育て応援企業として県知事賞を受賞した上田の松山株式会社労働組合を訪ねました。そこの従業員のお母さんがこの夏休み中は家で子供を見てくれる人がいないので会社に連れて出勤してはだめかとお茶を飲みながら話したことから始まった取り組みが7年目になります。小学生と一緒に入社して工場見学をしたり、社有林の観察をしてそこで採った竹を使って水鉄砲の工作をしたり、社員食堂でランチをとって宿題も違う部屋でして、親子で退社するという民間学校のようなことをしています。その他、中高生の職場体験学習も受け入れています。

やはり企業はステークホルダー（利害関係者）的な役割を地域で担っていく事があって良いのではないかと考えています。そういう面をまた提案したいと思います。

（山崎委員）

安曇野の山崎です、私は安曇野市商工会でコーディネーターをやっています。その関係で今年6月と9月に東北は石巻にあります雄勝町、もうひとつはテレビで話題になりました大川小学校のあたりに2回お邪魔をさせていただきました。お邪魔をさせて頂いた理由は、安曇野の若手そば屋さんの後継者の皆さんと一緒に仮設住宅を訪問し、蕎麦を食べさせて頂くという意欲ある人たちを先導して連れて行ったわけです。

安曇野市内には約100店舗蕎麦屋があります。その中の東北に行ったのは6店舗、この人たちは30・40代。若い方は28歳、その方々が自分たちで意欲的に仕事をして誰かの役に立ったという思いになりました。先日、信濃毎日新聞、松本市民タイムス、SBC、NHK等で放送され、彼らの意欲が非常に高まりました。また、安曇野市内の他の蕎麦屋さん達の間でも、取り組みが前向きになり意欲が高まってきました。

これはまさに蕎麦屋さんという一つの業種をとらえた中で、地域と連携をした生涯学習のあり方を紹介しましたが、他の人がそうした成功例をみて真似をしたくなっただけであれば、さらに仲間が増えて、先ほどの公民館のように皆と一緒に連携をしていくことが出来るのではないかということで今年度始めました。

成果として今市内で十何ヶ所か施設がありますが、施設の慰問も併せてするようになりました。そうすると、やはりテレビやラジオで報道してくださるので、目立ちたい奴はどんどん仲間に加わってくるだろうと、ちょっと生臭い事を考えてやりました結果、やはり参加してくれる人間が何人かおまして、少しずつ仲間が増える傾向にあります。公民館活動というのはそういうことなのだろうと、今日公民館館長さんのお話をお伺いする中で、私が今やっている仕事そのまま公民館活動と同じ様な事が出来るのだなと感じました。

（小林委員）

今年とても活動的な児童会担当の職員に恵まれましたので、その職員と打合せをして、

まず今も、そして将来も地域人である本校の子どもたちが愛でつながるような活動をしていこうじゃないかということを企んで「あいさつ・ふれあい・助け合いでつながる若槻小学校」というスローガンを掲げました。児童会活動をどんどんやってほしいとお願いをし、まず縦割りのグループ活動と、学校中がふれあい、助け合い、そして挨拶が満ちる学校でありたいと1学期推し進めました。そして、2学期の初めはさらに運動会がありますので、これはいいチャンスだと思い「いつになる」という言葉を全校の児童に始業式の時に投げかけましたらけっこうこれが耳珍しかった。目新しいではなく、耳珍しい言葉だと子ども達は受け止めてくれたようで運動会のスローガンに盛り込んでくれました。それに味をしめた私は、「いつになる」を地域のおじいちゃんおばあちゃんとやろうじゃないかと児童会長をくすぐりましたら、いいプランを出してくれて地域清掃に出ようじゃないかと縦割りのグループで地域清掃に出てくれる事になりました。最初地域の皆様は子どもたちが鎌や草かきを持ったりして地域に出るの危ないのじゃないかとすごく心配をして下さいましたが、ちょっとやらせてみて下さいとやらせてもらいましたら、当日応援に抱えつけてくれる方が何人もいましたし、麦茶をごちそうしてくれる方もいました。地域に子どもたちの存在感というのを示せたのかなと思います。学校への注文も多い地域でもありますが、そういう子どもたちの姿で、子どもをほめてもらえるようなそんな活動を前面にだすことで、地域へ打って出られる、地域とつながれる。そして地域で評価してもらえる事が、家庭の安定感につながるのかなとそんな事を思っております。今、まとめの時期になっておりますが、6年生を中心に老人ホーム等の訪問というのを企画してくれているので楽しみにしております。

感想になりますが、本日色々なところで地震についてのお話を伺いましたし、こうして実際自分が雪の中に身を置かせていただいて、こんな雪の中で地震が起きたらどうするのだろうとまさに体験をさせていただきました。体験に勝る知恵は無いと今日1日で感じさせていただきました。

(東福寺委員)

私はPTAの母親の一人として、PTAの役員として、PTAを通して母親同士学び合いながら親としての自分磨きができればと思って活動しております。PTAの講演会や分散会などで、母親同士仲良くして絆を強くしたいと望んでいます。特に今年度私の母体であります長野市PTA連合会で力を入れていることは、「学級懇談会に出よう」と力強く呼びかけております。「学級懇談会に出て悩みごとを共有し、自分だけじゃないんだと思えた」、「先生から授業のポイントやつまづきやすいところなどを教えてもらえ、家庭学習につながった」など様々な声があり、親同士の信頼関係、親と先生の信頼関係が築かれる場になっていると感じています。先ほども言いましたが、子どもたちの一番の教育者である学校と家庭が強く結びつくことは大切ではないでしょうか。

また、私は小学校で読み聞かせのボランティアを行っておりますが、私が所属する団体は地域住民の集まりで、1年に16回程小学校で読み聞かせをすることで、学校に関心を持ってもらう、学校に関心を持ちたいという両者がお互いを尊重し合い連携し、次代を担う子どもたちを育てていけるのだと思っております。昨今は子どもを取り巻く環境があまりにも複雑で、学校だけでは対応しきれない事柄が多いように思います。先生の手が届かな

いところを地域の人々の活力を借りて、子どもたちに与える事は今後ますます必要であると思っております。

今回この会に参加して感じたことは、小滝公民館長の中沢さんや、『結い』代表の相澤さんの熱意、非常に強い熱意が村を活性化させているのではないかと感心しております。

(三澤委員)

今日のためにちょっと本屋さんをのぞきましたら、松尾さんという方が栄村の地震の事について書いた本があって、二晩ばかり斜め読みした中に、結いという言葉の意味が書かれておりました。昔から自分の農地を守るために地域の人たちが共同で、いろいろな作業を行って自分の農地を守ってきたのが結いの精神だということが書かれてありました。小滝公民館の館長さんに「この方達は農地を全員お持ちなんですか」とお聞きしましたら、皆さん農地を持ってそれを守っているということを知りまして、また子どもさんからお年寄りまで参加して公民館を建て直したという話を聞いて、生まれた時からその精神がこの地域では培われているということを知りました。これからの教育に関わっていく中で、食農の大切さ、食農教育の大切さを改めて感じました。2・3歳児の親子の体験教室を、農業の体験教室として我が家の畑で行って、学校に上がる前の子ども達に食の大切さ、農業の大切さを教えていければ、何かの役に立つのではないかと感じております。

今日ここを視察して感じたことですが、なにかテレビ、新聞等で地震のことは毎日見てたわけですが、自分の身に起こったことではなかったもので、改めて防災頭巾も作らなくてはいけない。用意しておかなければいけないということを今日は痛切に感じました。

(木下委員)

今日は高校生ネタで通してみようかと思っています。現在、飯田長姫高校の商業科と一緒にやっている「地域人教育」の話を少し引用させていただきますが、今回高校の先生達と何度も飲み会が出来て、その中でいろいろな話を聞くことができ、それがまたすごく勉強になっているんですけど、「商業って何」という話でなるほどと思ったのが、要は物を売りたい人が一方でいて、物を買いたい人が一方でいて、言うなればそれぞれが悩んでいる。そういう困っている人たちをうまく結びつけるのが商業だというお話をいただきました。そのためには実際に現場現場でニーズが違ってきて、その地域ではどういうものが求められているのかということを知ることが必要だということです。これは山崎委員の専門分野のマーケティングという世界だと思うんですが、そういうことを知るためには地域に入り込んでいくことがものすごく意味があるんだということで、先生たちは私たちにすごく期待してくれているということをお話いただきました。

例えば6人の主事が自分の担当する地域の課題を探して高校生にプレゼンして、高校生たちがここに行ってみようという所に自主的に参加しているのです。そういう流れで作ったんですけど、例えば、国道のバイパスが出来てしまって旧国道の車や人が激減してしまった地域で、何とかもう1回商業を元気にさせたいという現場に高校生が入ってくれたり、飯田で一番山の奥の中山間地、上村の下栗という所なんですけど、そこで暮らしを営んでいる人たちと一緒に農業を体験してみたり、地域の事を勉強してみたりする中で、今高齢化率が、65歳以上の高齢化率が50パーセントを越えているこの地域で、この人たちがこれか

らどういうふうに住んでいったらいいのかなど、その時そのところに商業というニーズがどこにあるのか勉強してくれていると思っています。

実際長姫の先生達とお話ししていて、もう一つ印象に残っているのは、飯田の子たちは飯田を向いている。飯田下伊那を向いている子が多いと言います。例えば、先生は一人は小諸商業から、一人は塩尻志学館から来られた先生なのですが、本当かどうか分かりませんがその先生が言うには、「小諸の子は東京を向いている」「塩尻の子も東京を向いている」「けれども、飯田の子は飯田を向き、飯田が好きだ」ということなんです。どうもその一番の元には今日の小滝の公民館もそうなんですけども、日常的に地域の人たちの中で大事に育てられてきたということが原体験になっているのかなと思うのです。ただその割に地域の本当のことを知らないで、この子たちに地域の事を勉強する機会を作ると、自分はこの地域でやっぱりずっと暮らしていきたいんだ。そのためにはどういう仕事をしていきたいんだという動機づけになるんじゃないかということが、この「地域人教育」を始めた一つのきっかけなんです。だからそういう意味では若い人たちを地域でどういうふうに住んでいくかということを経験の時代にどれくらいできるのかなというのが、今すごく大事だと思いつつ仕事をしています。

栄村長さんの話をお聞きする中で、地域の人たちが自分たちの力で自分たちが暮らして困っているところを解決していくというところに、公民館の活動があり、協働で悩みを一緒に考えるとかいうところがあるということは前から聞いていたんですけど、そのことを実際、今日現場で実感する事ができました。

(北林委員)

今日の感想だけ一言述べさせていただきます。社会教育委員としまして公民館にも関わってまして、今日の公民館長さんの、本当にみなさんで作り上げている、たまたま建物だったんですが、その活動もおそらくみなさんで全て作り上げているんじゃないかなということを感じさせて頂いて、今公民館で何をやっても人が集まらないという声が出ていますが、帰りまして機会がありましたら公民館長さん方にこんなことをされていましてとお伝えして、みんな元気を出したいと思いました。

(土井会長)

委員の皆様、お一人お一人の日頃の実践、研究に基づいた今日の視察のご意見、本当に素晴らしい、大事なことをご指摘いただきと思ってお聞きしておりました。

私は、自己紹介の時に申し上げたんですけれども、学生が地域と係わる取組、学生が主体的に地域貢献する活動、これが来年20年目になります。平成6年に学校五日制というのが始まって、それに対応する形で「YOU遊サタデー」というものがスタートし、それがモデルケースとなって文部省によってフレンドシップ事業というものが推奨され、大学が平成16年から独立行政法人化したことによって、予算が切れてその政策が終わりましたが、それと関係なく学生たちには地域社会に入ることを求めて今日まで続いてきております。この取組に係る予算はゼロです。1年間に渡って学生は、青木村、麻績村、長野市大岡、長野市茂菅、長野市湯谷、須坂市、こういうところへ出向いております。それぞれの村や教育委員会と連携した年間を通した活動をしております。私は今日の小滝公民館の様

子をお聞きして、下高井農林高校の廃校になった校舎の廃材をそこに残している。一步あの部屋に入った時にこれはなんとすごい階段かと思ってびっくりしたんですが、それが高等学校の校舎のものを大事にしているという、そういうところにこれはちょっとすごい精神だなと感じました。そして掲げられてある額が、あれは小坂善太郎先生なんでしょうか、あの額が掲げられていて、こちらにも小坂さんは来ておられていたのかなと思いました。そしてあの館長さんの、とにかくあの屹立（きつりつ）した姿勢。どんと構えて一步も動かない。どんな嵐も、どんな苦難も迎えていくというような気迫のある説明、それが普通は村の中で未だに家長という言葉を使っておられて、昔のままなんだと思いました。今時家長なんていう言葉はえらい古いことになるんですが、ところが家長が代表として出るのではなくて、志のある人たちが集まってくる。こういうやり方で新しいプロジェクトを立ち上げてやってこられた。そして真っ先に、自分たちの家を建て直すのはもちろん大事なんですが、寄り集まって語り合う場がないことにはだめだということで、真っ先に公民館を立ち上げた。そしてみんなが参加するという、全員参加が大事な方針となってあのようになっている。ここにやっぱり、自分たちの居場所、自分たちの存在の証がある。よって立つべき所が公民館という、ここに小滝地区の、われわれがいる場所はここしかないんだと、ここを立ち上げてここから元気を出してみんなで元気になっていこうという。そういう自分たちの地域というものが元気になる元が公民館というところである。このことをどんな小さな子にも分からせようというので、最後の仕上げをさせた。こういうところにすごい精神があると思います。

これが長野県の公民館というものが昔から大事にしてきている精神であり、ここの栄村にも脈々と流れている。特に下伊那の人たちは大変熱心に取り組んでおられる。大地震という人知の計り知れないことで全てを失って何もかもなくなって、そうなった時に最後はどこから立ち上がるかという、立ち上がる原点が公民館というところにある、この人たちが求めているということをおは学んで、まさに我々のテーマである学びの絆ということと、地域の力、これはもう一体のもので、そもそも学び合う、寄り集まって語り合う、一杯飲んで正月歌を歌ってからみんなでゲームをする、年寄りも子どももゲームをする、そういうふうな、まさにこれは学びの場です。そこに地域の力というものが凝縮されているので、ここからしか力は出てこない。そういうことを私は感じました。

私たちの学生の話に戻りますが、予算もゼロ、授業化も何もない、やりたい人がやりたいことをやりたいようにやる、これが「YOU遊未来」の精神です。これが先輩から後輩へと一年一年受け継がれて途切れることがない。私は来年1年間で定年ですが、私が定年になろうがなるまいがそんなことは関係なく、21年目、22年目、その先々へと彼等は考えている。私は、この「YOU遊未来」、現在は未来を「チャンス」と呼んでいます、この取組を始めた時に、学生はこれを絶対授業科目にしないでくださいと私に言いました。私たちは単位が欲しいからこういう地域貢献の子どもと関わる取組をするんではありません。私たちはアルバイトとして、お金が欲しいからこういうことをするんではありません。だから授業科目にしないでください。私はこれを忠実に守って今日まで来ているわけです。彼らはこの「YOU遊未来」によって何を得るのか、なんのためにこういうことをするのか。先ほどの山崎委員のご発表にもありましたが、福島にお蕎麦の応援に行って喜んでもらった。喜んでもらって本当に嬉しい。こういう他者に尽くすこと、他者に喜んでもらう

こと、それが私の喜び。こういう喜びほど高度な喜びはなく、こういうことのボランティアの精神とか、地域貢献の精神とか、こういうものは人間として、きわめて高度な資質であるということに学生たちは気づくわけです。俺みたいなものが青木村に行って喜んでもらえた。俺も少しは役に立つところがあるんだなと。こういうふうにして自分を見直すきっかけになっているわけです。こうして100から150人の学生が、地域社会にお世話になっております。これは金でもなければ、名誉でもなければ、単位でもない。人間として地域に喜んでもらえる自分になるためにやっている。この精神がやっぱり小論文なり、面接なり、いろんなところに滲み出ているように思います。

それでは以上をもちまして長野県生涯学習審議会を終了とさせていただきます。

## 6 閉会行事

(栄小学校)

- (1) 栄村教育委員会教育長挨拶
- (2) 諸連絡